



結実した高い志と心の鍛錬

かす が め こ ぼ ん
春日亀 小判さん

「土光杯弁論大会」優秀賞

学生らの主張の場として知られる「第32回土光杯全日本青年弁論大会」（主催・フジサンケイグループ）が1月9日、東京都内で行われ、中央大学法学部4年の春日亀小判（かすがめ・こぼん）さんが優秀賞の「ニッポン放送杯」を獲得した。この日は事前の論文審査を通過した15人が参加した。

土光杯で弁論する春日亀さん（写真提供：産経新聞社）

ことしの土光杯大会テーマは「今こそ“日本出動”のとき」

春日亀さんは、自らが学生時代に立ち上げた学習塾の体験を元に「起業大国日本へ」と題して熱弁をふるい、国家や社会に起業支援を求めた。

違和感から 学習塾立ち上げ

学習塾設立は中大2年の夏だった。講師として在籍していた大手学習塾に強い違和感を覚えた。高額と思われる料金設定、生徒に勉強を過度に強いる指導者・経営陣。

「やる気がある生徒がいます。こちらもっと教えたい」。双方の向学心は「これ以上は別料金」という壁に跳ね返された。

持ち時間は8分間。会場の約300人の聴衆をまっすぐ見つめた。客席の母の顔も分かった。母は息子の弁論を初めて聴いた。

時に客席の左右へ顔を向け、熱い思いを冷静に分かりやすい言葉で伝えた。机上のメモを見たのは、ほんの数回だった。

審査委員は新聞社論説委員長、テレビ・ラジオ局の解説委員長、報道部長ら。話のスペシャリスト、平野啓子氏（語り部、かたりすと）も加わった。

弁論大会参加者は全国の一般応募者の中から論文審査を通過した精鋭15人。春日亀さんは初出場ながら優秀賞の一つ、ニッポン放送杯の栄に浴した。主張の要旨は産経新聞1月

26日付（東京本社発行版）に壇上写真とともに掲載された。

やじに動じぬ力

明瞭で落ち着いた弁論ぶりを問われると「緊張しましたが、やはり慣



れでしょうか」との答えが返ってきた。

入学以来、中大「辞達学会」(弁論部)に所属。創設から115年余の歴史を有するサークルで弁論を研さんしてきた。

「それはただの主観だろう!」「なぜ次善策をうたない!」「それで本当に救われるんですか!」。多摩キャンパスサークル棟の部室では“やじ”を飛ばす練習もする。

弁士に求められるのは、やじに動ぜず、堂々と演説を続けること。弁論は精神力の鍛錬でもある。

「ずいぶんと鍛えられました。やじも上級生になるとスマートになって、一言で弁士を刺激します」

活動の基本には、話し方や聴衆へのアピール、立つ姿勢などがある。春日亀さんは1年生だった2011年12月、東大で行われた学生弁論大会で準優勝するほどの実力者だ。

土光杯に応募したのは、この準優勝が起因となった。加えて、学生生活最後となる弁論大会、マスコミが主催する大規模大会にも心が動いた。他大学を含めた従来の学生大会とは違う、いわば他流試合に挑む思いだった。

夜行バスで京都へ

教育格差をテーマにした東大会場での弁論を「論」で終わらせたくはなかった。教育の機会・環境に大きな課題があることに憤慨。「自分が

まず行動しよう」と学習塾を立ち上げた。

辞達学会OBらによる協力を得て、若き校長が誕生した。中大のユニバーサル・メッセージ『行動する知性。』の実践者である。

ある日、学習塾の高校2年生が悩んでいた。家庭環境から国公立大学への進学を要望されていたが、志望の大学が見当たらないという。

「よし、それならば」と京都市の夜行バスに生徒と並んで乗車。知己を頼って京都大キャンパスや学生寮を見学できた。寮生との会話がはずんだ生徒は京大を熱望するようになり、勉強にいっそう身が入った。

「頑張っていましたから何とかかになりたかった」と照れながら話した。旅費・滞在費などで生徒に負担はかけなかった。ついつい持ち出しになってしまう。

就職、政治… やりたいことは

4月から教育系ベンチャー企業に就職する。

いずれは起業を考える時がくるだろう。いまや小・中学生約50人が集う学習塾は後輩に託した。が、命を吹き込んだ塾に再び参画したい気持ちもある。

一方では、さわやかな弁舌を見込まれて選挙運動のアナウンス(アルバイト)に起用された。それが端緒に政治への関心が高まった。やりた

いことはいっぱいあるようだ。

滑舌のよさはアナウンス・スクール仕込み。就職活動で競争率の高い在京キー局の採用試験に“あと一步”のところまで進んだ。

「でも無駄にはなっていないと思います。どんな仕事に就いても人と話すことは大切です」

弁が立つ男は、土光杯のテーマ「今こそ、出勤のとき!」を心に掲げ、中大を卒業する。

全国に30人…父の旧姓は名前に

春日亀(かすがめ) 姓を名乗るのは「全国に30人ほどいるようです。うちの家系は7人」。京都由来の名字で、春日亀家の菩提寺も京都市にあった。母方の名字が希少とあって、理解ある父が婿入りした。父の旧姓は「伴」。ばんの息子に「小判」との名が付いた。春日亀小判さんは「人に覚えてもらいやすく、就活でもよく聞かれました」とほほえんだ。



土光杯全日本青年弁論大会

行政改革に大きな足跡を残した故土光敏夫臨時行政調査会長の「行革の実行には若い力が必要」との呼びかけに応じてフジサンケイグループが昭和60(1985)年に創設。テーマはその後、拡大され、日本の将来を担う若者の主張の場として毎年開催される。(産経新聞より)